

## シリア・イスラーム革命宣言および綱領

訳・注解 末近 浩太\*

本稿は、シリア・イスラーム革命指導部 (Qiyāda al-Thawra al-Islāmīya fī Sūriyā) が1980年11月9日 (ヒジュラ暦1401年元日) に発表した「シリア・イスラーム革命宣言および綱領 (Bayān al-Thawra al-Islāmīya fī Sūriyā wa Minhāju-hā)」(以下、「宣言および綱領」) を訳出したものである。同文書は、「シリア・イスラーム革命宣言」と「シリア・イスラーム革命綱領」の2部構成となっており、ここでは第1部のみを訳出した。第2部の訳出については、稿を改めたい。

### I. 社会運動から革命へ

「宣言および綱領」は、物理的な力によるアサド・バアス党政権の打倒を呼びかけ、新たな国家建設のプログラムを提示するものであった。この文書の末尾には、サイド・ハウワー (Sa'īd Ḥawwā, 1935-1989)、アリー・サドルッディーン・アル=バヤヌーニー ('Alī Ṣadr al-Dīn al-Bayānūnī, 1938-)、アドナーン・サアドゥッディーン (Adnān Sa'ad al-Dīn, 1932?-) の3名の署名が付されている (署名順)。

ハウワーは、1960年代後半から80年代末にかけてのシリア・ムスリム同胞団 (Jamā'a al-Ikhwān al-Muslimīn fī Sūriyā, 以下、同胞団) の中心的イデオログであった [小杉1993; 末近2005: 226-229; Weismann 1993, 1997]。バヤヌーニーは、1970年代以来の同胞団の幹部であり、1996年からは「最高監督者 (al-murāqib al-'āmm)」の地位にある (現在はロンドン在住)。サアドゥッディーンは、1975年から79年にかけて最高監督者を務めた人物であり<sup>1)</sup>、1982年のいわゆる「ハマー虐殺」の後にイラクへ亡命し、2003年の「イラク戦争」後はヨルダンへと居を移した。現在は同胞団指導部の一線からは退いている。

「宣言および綱領」の発表後、1981年1月17日、3人が属していた同胞団を中心にシリア国内のイスラーム主義勢力を糾合した「シリア・イスラーム戦線 (al-Jabha al-Islāmīya fī Sūriyā)」(ムハンマド・アブー・アン=ナスル・アル=バヤヌーニー (Muḥammad Abū al-Naṣr al-Bayānūnī) 書記長) の結成が宣言された<sup>2)</sup>。そして、バアス党政権を打倒すべく、シリア国民に対してその力の結集が呼びかけられた。つまり、「宣言および綱領」の発表とシリア・イスラーム戦線の結成は、同胞団を中心とした社会運動を民衆による革命へと昇華しようとする試みであったと言える。こうして共和国史上最大の反体制運動および民衆蜂起が現出したのである<sup>3)</sup>。

---

\* 立命館大学准教授

- 1) 1980年代後半にシリア・ムスリム同胞団の指導部がヨルダン派とイラク派に分裂した際、後者に属していたサアドゥッディーンは最高監督者を名乗っていた (1986～1989年)。前者においては、アブドゥルファッターフ・アブー・グッダ ('Abdul al-Fattah Abū Ghudda) が最高監督者を名乗っていた。
- 2) シリア・イスラーム戦線を構成した組織・運動は、以下の3つのグループに分類できる。(1) ムスリム同胞団 (軍事部門であった戦闘前衛隊 (al-Talī'a al-Muqātila) と支持母体の1つであったウラマー連盟 (Rabi'a al-'Ulamā') を含む)、(2) 個人有力者、(3) スーフィー系団体である。筆者によるアブドゥッラー・ムハンマド・タンターウィー ('Abd Allāh Muḥammad al-Taṅṭāwī) へのインタビューによる (2004年8月29日、アンマン)。詳しくは [末近2005: 261-269] を参照。
- 3) 1970年代から80年代初頭にかけてのシリアのイスラーム主義勢力による反体制運動の動静および「シリア・イスラーム革命宣言および綱領」については、[末近2005] の第IV部で詳論したので、こちらを参照されたい。

表1 : 「シリア・イスラーム革命宣言および綱領」の主要関係者

名前	教育・職業	出身	1981年当時の地位
サイド・ハウワー	アーリム、 スーフィー	ハマーの下層中産階級	シリア・ムスリム同胞団、 北部派メンバー
アリー・サドルッディーン・ アル＝バヤヌーニー	弁護士	アレppoのウラマーの家系（ア ブー・アル＝ナスルとは兄弟）	シリア・ムスリム同胞団、 副最高監督者
アドナーン・サアドウッディ ーン	教育者、 文筆家	ハマーの下層中産階級	シリア・ムスリム同胞団、 アレppo支部長
ムハンマド・アブー・アル＝ ナスル・アル＝バヤヌーニー	アーリム	アレppoのウラマーの家系	アブー・ザッル団→シリア・ イスラーム戦線書記長

出所：[Dekmejian 1985: 120-121] の表に筆者が修正。

## II. イスラーム革命の時代

このシリア・イスラーム革命の挑戦は、「ハマー虐殺」に象徴されるバアス党政権による未曾有の暴力にさらされることで、結果的に成功を収めることはなかった。むしろ、この「革命」の蹉跌は、シリアが強力な軍と治安機構、巨大な官僚機構を備えた近代国家となったことを国内外に知らしめ、また、バアス党政権を権威主義体制のさらなる強化へと向かわせるきっかけとなった [末近 2005: 268-269]。一般的に、不成功に終わった「革命」は、中野実に倣えば、単なる「反乱」と呼ぶこともできよう [中野 1989: 12-13]。

また、この「革命」という響き自体、やや時代錯誤的な印象を与えるかもしれない。というのも、「宣言および綱領」が発表された1981年は、世界を見渡しても「革命の時代」が過ぎた後であった。特に中東地域で革命の嵐が吹き荒れたのは1950年代から60年代にかけてであり、実際に起こった革命のほとんどがいわゆる反ブルジョアジーの階級闘争や民族主義の台頭によるものであった。シリアのバアス党政権は、まさに1963年に「革命」によって誕生した政権であった。したがって、結果的にシリア・イスラーム革命の挑戦は、「革命の時代」が過ぎた後の、同国における「再革命」あるいは「対抗革命」という性格を持つものとなった。

しかし、これらのことから、シリア・イスラーム革命の挑戦が無謀な試みであり、また時代錯誤であったと断じるのは早計であろう。それには2つの理由がある。

第1に、1950年代から60年代にアラブ諸国で成功した「革命」は、そのすべてが軍部を中心としたクーデタまたは軍部を把握することによるクーデタであった。シリアをはじめとして、エジプト、アルジェリア、リビア、イラク、イエメンにおいて遂行された「革命」は、完遂後に国民の理解と支持を仰ぐ性格のものであった。その意味では、事後的に国民からの一定の承認を得たとしても、これらの「革命」は民意を置き去りにして遂行されたものであったと見ることができる。

むしろ、シリア・イスラーム革命が国民の総意によるものだったということなどできない。「革命宣言および綱領」は、1970年代末における少数の急進的なイスラーム主義者による一連の反政府武装闘争の果てに発表されたものであったため、結果的に国民に対して既に開始された蜂起への参加を呼びかけるものとなった。しかし、その闘争が軍部や政府内のエリート主導ではなく、市民社会の側からのものであったこと、そして、多くの国民がその呼びかけに賛同し、全国規模で蜂起に参加した事実には留意すべきであろう。事実、「宣言および綱領」が発表される半年前である

1980年3月の段階で、同胞団を中心とした反政府武装闘争は、ハマー、ホムス、アレッポなどのシリアの主要都市における民衆蜂起へと発展的な拡大を見せていた。この時期のシリアにおける内戦とも呼べるような状況——首都だけではなく多くの地方の市町村においても軍部が展開し、蜂起の鎮圧に奔走したような状況——は、クーデタとは全く異なる様相を呈するものである。この「革命」はいわば市民社会からの異議申し立てであった。そのため、バアス党政権と「反政府組織」（あるいは「テロ組織」としての同胞団との対決といった図式で説明することは、単純化のそしりを免れないだろう。

第2に、1979年にイランにおいてより純粋な革命、すなわち民衆による体制転換が成功していたことを勘案すれば、シリア・イスラーム革命が非現実的なものであったと言い切ることは、結果の過去への投影を慎むという意味で若干の留保が要る。シリア・イスラーム戦線指導部は革命イランとの直接的な関係を持っていなかったとされるが<sup>4)</sup>、1981年当時の中東地域にはイランのイスラーム革命が飛び火する現実味と警戒感が広がっていた。では、なぜイスラーム革命がイランでは成功し、シリアでは失敗したのか。シリアは歴史的に宗派やエスニックな多様性を抱えていたため革命勢力の糾合が困難であったこと、この多様性がフランス委任統治期（1920～1943）に政治的な亀裂へと変容したこと（例えば、政府および軍におけるマイノリティの優先的登用）、あるいは、同胞団がスンナ派のブルジョアジーを主な支持基盤としていたため、他宗派や貧困層の動員に失敗したことなどが指摘されてきた。いずれの説明もそれぞれ妥当性を有しており、どれか一つを選択するのではなく、これらを複合的に考える必要があるだろう。しかし、ここでの問題関心である革命の現実味という点に引きつけてみれば、イラン革命はシリアにおけるイスラーム革命の機運を後押しし、成功の現実味を醸成する側面も有していたが、他方で、バアス党政権に対して革命への強烈な危機感を植え付けるのに十分なものであった。1970年代においてイランのシャー（およびその「後見人」であった米国）が革命の現実味をそれほど意識していなかったのと比較すれば、1981年当時のシリアでは政府と市民社会の両者がそれを共有していたと言える。むしろ、より強い現実味を感じ取っていたのは政権側だったのかもしれない。市民をブルドーザーで家屋ごとすり潰すような「ハマー虐殺」の異常性が、このことを物語っているようにも思える<sup>5)</sup>。

パトリック・スィール（Patrick Seale）は、「ハマ [ママ] は食うか食われるかの最後の戦いであり、いずれにしても国の運命を決めるものであった」と述べている [スィール 1993: 331; Seale 1989: 333]。この天下分け目の大戦に勝利したバアス党政権は、その後あたかもシリア・イスラーム革命が決して「革命」などでなく、無謀で時代錯誤な「反乱」であったと繰り返し述べてきた。しかし、現実を逆から捉えることもできよう。バアス党政権はそれを「革命」として意識したからこそ、かくも徹底的な対応をしたのだ、と。そうだとすれば、「革命」への警戒感から引き起こされた「ハマー虐殺」を通して、シリア・イスラーム革命が本質的に誤りであったとする言説を国内外に浸透させ

4) サイド・ハウワーは革命直後のイランを訪れ、ホメイニーと面会したとされる。ただし、イラン革命政府とアサド・バアス党政権との関係について意見を交わしたものの、シリア国内で当時激化していた武力を伴う反体制運動についてはほとんど触れられなかったようである [Hawwā 1987: 137]。同胞団は、ホメイニーに支持を求めたものの、具体的な返答はなかった。それは、当時イラン革命政府が、シリア政府とレバノンのシア派イスラーム組織「アマル運動 (Haraka al-'Amal)」との関係を強化していたこと、そして、革命後対立が深まっていたイラクを牽制するためにシリア政府を支持していたことが、その理由として挙げられている [Batatu 1988: 112-113]。

5) 1982年2月にハマー市で実行された武装蜂起では、同胞団員約400人と市民約2,000人が参加した。死傷者は、5,000人から10,000人と言われている。同市の旧市街の3分の1が破壊され、60,000人から70,000人の住民が家を失った。また、88のモスク、5つの教会、21のスーク、7つの墓地、7つのハンマーム（公衆浴場）、近隣の13の町も破壊された [Amnesty International 1983: 36-38; スィール 1993: 330-333; Seale 1989: 332-334]。なお、今日の同胞団の公式見解では、1982年の「ハマー虐殺」の犠牲者は25,000人以上とされている。アリー・サドルディーン・バヤーヌーニーへのインタビューによる（ロンドン、2003年2月28日）。

てきたことは皮肉である。つまり、バアス党政権が「革命」として対応したことが、「革命」ではなかったという言説を広めるという予期せぬ（あるいは期待以上の）結果を生んだのである。

### Ⅲ. イスラーム革命の近代性と反近代性

ところで、革命を「既存の政治権力を打倒して、新たな政治体制を樹立する行動」と定義するならば [小松 2002: 252]、それは前近代の歴代イスラーム王朝においてイスラーム法的に容認されることは皆無であった。なぜならば、神の意思に従って築き上げた秩序を転覆することは不敬の行為であるという見解が、ムスリムのあいだで主流であったためである。しかし、近代以降、西洋初列強による植民地支配や世俗国家の誕生など政治体制の脱イスラーム化が進んでいくなか、革命はイスラーム的政治体制の再興を目指す行動として正当化・理論化されるようになった [小松 2002: 252]。その意味では、イスラームと革命の結合は、極めて近代的な現象なのである。

歴史的シリア (Bilād al-Shām、シャーム地方) の文脈で言えば、ムハンマド・ラシード・リダー (Muḥammad Rashīd Riḍā, 1865-1935) が、いわゆる「革命権」の思想を説いた人物として挙げなければならない。リダーは、時の権力であったイスラーム国家オスマン帝国がその領土を西洋諸列強に分割・支配され、トルコ人を中心とするナショナリズムに傾倒していくなかで、ムスリムはイスラーム法を適切に施行できる国家元首を擁立する権利を擁すると論じた [リダー 1987: 35-38; 末近 2005: 138-148]。

しかし、リダーがこの世を去った後のシリアにおいて実際に革命を成功させたのは、他ならぬバアス党であった。上述のように、多かれ少なかれ西洋諸列強の植民地主義の意向を反映させて誕生した中東諸国において、次々に革命による——実際にはクーデタの場合がほとんどであったが——政権転覆が起り、その後は革命勢力による国家権力の独占が進んでいく。その様子を目の当たりにした一部のイスラーム勢力は、革命の「イスラーム的転回」を試みていった。すなわち、力による既存の政治権力の転覆をイスラーム法的に合法・正当であると解釈するだけでなく、ムスリムの義務であるとも説いていったのである。このような革命を志向したイスラーム思想家としては、エジプトのサイイド・クトゥブ (Sayyid Qutb) やパキスタンのアブー・アーラー・マウドゥーディー (Abū al-A‘lā al-Mawḍūdī)、イラクのムハンマド・バーキル・アッサドル (Muḥammad Bāqir al-Ṣadr)、レバノンのムハンマド・フサイン・ファドルッラー (Muḥammad Ḥusayn Faḍl Allāh)、イランのルーホッラー・ホメイニー (Rūḥ Allāh Khumaynī) などが挙げられよう。これらの革命思想の理論家たちが第二次大戦後に次々と誕生した世俗的な革命政権による抑圧や弾圧をきっかけとして誕生していったことは皮肉である。こうして見てみると、イスラーム革命は、植民地支配や世俗国家に対峙しようとする反近代的 (反西洋的) な側面と、今日の国民国家における権力闘争の手段として発展してきたという近代的な側面を兼ね備えていることがわかる [末近 2006: 257-258]。

「革命宣言および綱領」の3人の署名者の1人、サイード・ハウワー<sup>6)</sup>は、その著書『神の兵士：そのプログラム (Jund Allāh Takhṭīṭan)』において、ジハードについてエジプトのムスリム同胞団の創始者ハサン・アル＝バンナー (Ḥasan al-Bannā) の思想に触れながら、次のように述べている。

6) 「革命宣言および綱領」の作成において、草案についてはサアドウッディーンが用意したとされる。タンターウィーへのインタビューによる (2003年2月5日、アンマン)。トーマス・マイヤー (Thomas Mayer) は、その内容にハウワーの著作の影響が明らかに見て取れると述べている [Mayer 1983: 600]。ハウワーの同胞団指導部内での地位や思想家としての活躍を考慮すれば、この見解には十分な説得力がある [末近 2005: 261-269]。

「アル＝バンナー師の『ジハードこそ我らの道』というスローガンは、植民地主義に対するジハード、あるいは明らかな不信仰に対するジハード、イスラームの破壊を望むものに対する場合のことを示していると理解しなければならない。……今日のイスラーム運動にとっての諸体制は様々である、助言を与える以外には関係を持ちたくない体制と、我々が断固戦わなければならない諸体制もある。」[Hawwā 1995: 133]

このように、ハウワーによれば、無条件の武力行使が否定される一方で、イスラーム運動が対峙する体制のあり方次第では武装闘争は義務となる。この体制の区別については、『神の兵士——その文化と倫理 (*Jund Allāh Thaqāfatan wa Akhlāqan*)』の「政治的ジハード」と題した項で明らかにされている。それは、(1) 公正なイスラーム的政府、(2) 不正なイスラーム的政府、(3) 不信仰者の政府であり、それぞれ、忠誠、矯正、闘争でもって向き合う必要性が示される [Hawwā 1998: 378]。バアス党政権は、1963年に政権の座についてから権威主義体制を確立・強化していった。これにともない、ハウワーにとって同政権は(2)から(3)へと移行し、もはや矯正ではなく闘争によって根本からすげ替えなければならない存在となっていったのである。矯正という方法が不可能であるとの判断は、バアス党政権を不信仰者と見なすムスリムにとっての主観的問題と言えるかもしれない。しかし、同政権が市民社会に対する抑圧を強化し、民主的なチャンネルを閉ざしていくにつれて、彼らが何らかの要求を訴え実現することは客観的にも困難となっていった。

1980年3月以降、シリア全土で政府に抗議するデモやストが広がるにつれて、バアス党政権は社会に対する抑圧的な姿勢を一層強めていく。6月には、パルミラの軍刑務所に革命防衛隊 (*Sarāyā al-Difā‘ ‘an al-Thawra*) を投入し、政治犯として収監されていた同胞団メンバー約700名を殺害、翌月には、議会で同胞団を支持する(とされる)あらゆる関係者を死刑に処すとした「1980年法律第49号」を制定した。また、8月にはアレppoで治安部隊が80名を超える住民を殺害した。このような一連のバアス党政権の弾圧を受けて、1980年11月、「宣言および綱領」が発表されたのである。そして、ハウワーを含む同胞団指導部は、「革命の強化こそが成功への道」との立場を正式に打ち出すことになったのである [Hawwā 1987: 138]。

#### IV. 翻訳について

翻訳のテキストは、[*Qiyāda al-Thawra al-Islāmīya fī Sūriyā* 1980] を用いた。この文書については、ウマル・アブドゥッラー (Umar F. Abd-Allah) による英訳が存在する [Abd-Allah 1983]。この英訳を適宜参照しつつ、アラビア語原典からの訳出というかたちをとった。なお、訳文中の( )は言語の転写、[ ]は役者が補足した言葉である。

クルアーンの引用は、日本ムスリム協会発行の『日亜対訳・注解 聖クルアーン』を参照した [日本ムスリム協会 1996]。

#### 引用文献

- 小杉泰 1993 「[研究ノート] シリアのムスリム同胞団とサイド・ハウワー:ある思想家の軌跡」『国際大学中東研究所紀要』(7), pp. 47-67.  
 小松久夫 2002 「革命」大塚和夫・小杉泰・小松久夫・東長靖・羽田正・山内昌之編『岩波イスラーム』

- ム辞典』岩波書店, p. 252.
- シール, バトリック 1993 (佐藤紀久夫訳) 『アサド: 中東の謀略線』時事通信社.
- 末近浩太 2005 『現代シリアの国家変容とイスラーム』ナカニシヤ出版.
- 2006 「イスラーム革命: いかに国民の政治要求とイスラーム意識をくみ取るか」小杉泰・江川ひかり編 『イスラーム: 社会生活・思想・歴史』新曜社, pp. 256-259.
- 中野実 1989 『革命』(現代政治学叢書 4) 東京大学出版会.
- 日本ムスリム協会 1996 『日垂対訳・注解 聖クルアーン』日本ムスリム協会.
- リダー, ムハンマド・ラシード 1987 (小杉泰編訳・解説) 『現代イスラーム国家論: 「アル=マナー」派思想における政府と立法』国際大学中東地域研究科.
- Abd-Allah, Umar F. 1983. *The Islamic Struggle in Syria*. Berkeley: Mizan Press.
- Amnesty International. 1983. *Report from Amnesty International to the Government of the Syrian Arab Republic*. London: Amnesty International.
- Batatu, Hanna. 1988. "Syria's Muslim Brethren," in Fred Halliday and Hamza Alavi eds., *State and Ideology in the Middle East and Pakistan*, New York: Monthly Review Press, pp. 112-132.
- Dekmejian, R. Hrair. 1985. *Islam in Revolution: Fundamentalism in the Arab World*. New York: Syracuse University Press.
- Ḥawwā, Sa'īd. 1987. *Hādhihi Tajribatī...wa Hādhihi Shahādātī*. Cairo: Maktaba al-Wahba.
- Ḥawwā, Sa'īd. 1995. *Jund Allāh Takhḥīṭan*, 2nd ed. Cairo: Maktaba al-Wahba.
- Ḥawwā, Sa'īd. 1998. *Jund Allāh Thaqāfatan wa Akhlāqan*, 2nd ed. Cairo: Dār al-Salām.
- Mayer, Thomas. 1983. "The Islamic Opposition in Syria, 1961-1982," *Orient* 24(4), pp. 589-609
- Qiyāda al-Thawra al-Islāmīya fī Sūriyā. 1980. "Bayān al-Thawra al-Islāmīya fī Sūriyā wa Minhāju-hā," n.p.
- Seale, Patrick. 1989. *Asad of Syria: The Struggle for the Middle East*. Berkeley & Los Angeles & London: University of California Press.
- Weisman, Itzhak. 1993. "Sa'īd Hawwa: The Making of a Radical Muslim Thinker in Modern Syria," *Middle Eastern Studies* 29(4), pp. 601-623.
- Weisman, Itzhak 1997. "Sa'īd Hawwa and Islamic Revivalism in Ba'ṭhist Syria," *Studia Islamica* 85, pp. 131-154.

## 「シリア・イスラーム革命宣言および綱領」

慈悲あまねく慈悲深きアッラーの御名において

### 第1部 シリア・イスラーム革命宣言

世界の創造主であるアッラーに讃えあれ。使徒たちの指導者、最後の預言者、ムジャーヒディーンの司令官であるムハンマドと、その家族たち、仲間たち、そしてスンナに従い終末の日までそのダアワを行う者たちに、祝福と平和があらんことを。

祖国の同胞たちよ

現代のイスラーム革命は、アッラーの言葉の体現と、地上におけるその法の実現のためのジハードの義務を負っている。そして、アッラーと人類の敵からの猛攻を耐えるなかで、アッラーの約束が果たされることを確信している。そして、あなた方に伝えたい。いたるところでうねりを見せるイスラームの潮流が徐々に押し寄せてきており、その教えがすべての悪、不正、無知の軍勢に対して完全なる勝利を遂げるまで決して収まることはないということ。

#### 1. 「アッラーは、かれ〔アッラー〕に協力する者を助けられる。」(巡礼章 40)

不信仰を撲滅し他者への依存を脱却すべく、現代のイスラーム革命には次の義務がある。すなわち、もしアッラーの統治の御意志がこの世界に実現されるとすれば、それは真のムスリムが尽くす努力のみによってなされる、ということを知らしめる義務である。アッラーと人類の敵に対する闘争に参加する者は、誰一人としてこのことを忘れてはならない。

「アッラーは、あなたがたの中、信仰して善い行いに勤しむ者には、あなたがた以前の者に継がせたように、この大地を継がせることを約束された。そしてかれらのために、かれ〔アッラー〕が選ばれるものを、かれらの揺るぎない宗教となされ、かれらの恐怖（不安の生活）を、安心無事（の境遇）に変えられる。かれらはわれ〔アッラー〕に仕え、われ〔アッラー〕に何もものをも配しない。だがそれ以後になお不信心になる者こそは、主の掟に背く者である。」(御光章 55)

「アッラーは、かれ〔アッラー〕に協力するものを助けられる。本当にアッラーは、強大で威力ならびなき方であられる。(かれ〔アッラー〕に協力する者とは) もしわれ〔アッラー〕の取り計らいで地上に（支配権を）確立すると礼拝のつとめを守り、定め喜捨をなし、(人びとに) 正義を銘じ、邪悪を禁ずる者である。」(巡礼章 40-41)

これらの章句は、すべてのムスリムにとっての義務を明らかにしている。すなわち、先を見越し警戒を怠らず、すべての時間と労力を最も重要な義務、つまりイスラームの義務に捧げなくてはならない。

## 2. 不信仰をもたらした逸脱

預言者時代と正統カリフ時代に生きたムスリムたちは、後に理想的な規範として受け継がれるような、完全なる道筋を示すという奇跡を起こした。しかし、時代が下るにつれて、逸脱が始まり、ジャーヒリーヤが再びその醜い頭を擡げることとなった。人々は自らの欲望と権力の掌握のための抗争に明け暮れることで、ウンマの真実を否定し、その幸福に対しての罪を犯してきたのである。ムスリムのあいだでのアサビーヤの拡大、逸脱した思想と反イスラーム的な慣習の拡大により、ジャーヒリーヤは長い間にわたってムスリムの生活に暗い影を落とし、為政者 (al-ḥakimūn) と民衆 (al-maḥkūmūn) とのあいだの信頼関係を消滅させてしまった。

その必然的な結果が、社会の統一性 (al-waḥda al-jāmi'a) の崩壊と、宗派閥 (ṭawā'if mubā'ida) の形成であった。その結果、勝利を収めるべく押し寄せていた熱狂は徐々に後退を見せ始め、反対にイスラームに対する復讐に燃える敵の軍勢が押し戻し、最後にはかなりの規模の成功を収めてしまった。アッラーは、ムスリムたちに対して、敵の眼前で息絶えた者たちと同じ運命を辿らないように、そして人間と自然におけるアッラーの徴を心に留めるように警告している。しかし残念なことに、個人的な欲望の誘惑は、これらの警告を席卷してしまったのである。イスラームは、その信徒と信奉者、さらにはその使命を担う者たちによってすら放棄され、その結果、世界の舞台 (al-sāḥa al-'ālamīya) から退き、長い間その外部にとどまることとなってしまったのである。このようなムスリムたちは無知と後進性の奴隷となり、彼らの影響力も人間性の美德に対する貢献も途絶えてしまったのである。

## 3. イスラームは決して偽り伝えられることも歪曲されることもない

しかしながら、たった一つ敵には理解できないことがある。それは、イスラームがこの現世におけるアッラーの法であり、この世界における秩序であるという事実、そして、その神聖かつ永遠なる本質において偽り伝えることも歪曲できないという事実である。良心と誠実さをもってそれを実現しようとする者にとっても、あるいは、悪徳と悪行に沈潜する者にとっても、イスラームは純粹でただ一点の汚れもない。

「もしあなたがたが背き去るならば、かれ〔アッラー〕はあなたがた以外の民を代りに立てられよう。それらはあなたがたと同様ではないであろう。」(ムハンマド章 38)

イスラームの偉大さは、初期のムスリムたちが他の人々 (al-nās) に改宗を呼びかけた際に、彼らを短期間のうちにその教えを受け入れさせたその方法に現れている。しかし、後のムスリムはその偉大な教えに背を向け、その結果、自らの言動の過ちに苦しむこととなった。これは、第1次世界大戦の終わりに最高潮に達し、イスラーム世界は分断され、植民地主義による直接支配の手に墜ちたのである。

今世紀〔20世紀〕のはじめには、異なる2つの潮流が生まれた。最初の潮流は、ムスリムの完全なる敗北によって大きく損害を受けたが、失った力を取り戻すためにムスリムたちの統一が必要だと信じるものである。もう1つの潮流は、科学こそがムスリムたちに本来の地位を再興するための力をもたらすものであると期待する、科学の拡大を究極的な目標とするものである。



#### 4. ハサン・バンナー師のダアワ

しかしながら、いずれの潮流も今日のイスラーム革命が必要とするものを満たすには不十分であった。つまり、実際のところは、包括的な運動が必要となっているのである。その運動は、イスラームを信仰実践、倫理、美德といった道徳的側面やアッラーの法によって人々の生活を調整する法的側面をはじめとする、あらゆる側面を包括する不可分で完全なるものにする。この条件を満たしたのが、殉教者ハサン・アル＝バンナー師によって結成されたムスリム同胞団であった。

殉教者アル＝バンナー師のダアワは、その黎明期からイスラームの敵の脅威についての警告を行った。敵は、そのダアワが計画通りに行われることによって、イスラーム地域 (al-mintaqa al-Islāmīya) ないしそれぞれの地域において直面することになる脅威の現実味と程度を認識していた。

そのため、殉教者アル＝バンナー師は卑劣にも暗殺され、その教えに共鳴し、その教えを救済への道と見なした者たちは収容所へと送られることになったのである。

#### 5. ムスリムたちに拡大する新たな精神

現在、イスラーム的領域 (al-sāha al-Islāmīya) を覆う状況は、もはや1950年代のそれと同じではない。当時は、アラブ・ワタンないしムスリム世界のいたるところで、イスラーム革命には厳しい攻撃が加えられており、イスラーム革命家たちは殲滅あるいは弱体化させられた。しかし、今日では、イスラームはあらゆるところで復興と隆盛を見せており、敵とその内通者および工作員たちを恐れさせている。

アラブの地域 (al-quṭr al-‘Arabī) の1つであるシリアにおいては、今日、イスラーム革命がアッラーと人類の敵に直面したムスリムたちの最も大きな責務を負っている。したがって、この革命は、この包括的な宣言と詳細な綱領を通して、私たちが歩むべき道をウンマに提示することを義務だと考えている。この宣言と綱領において、私たちのなかの誇り高い人々の多くが、これ以上の凋落を阻止するために行動と心を共に集結し、アッラーのお力添えによって復興の活動と勝利の行進を開始してくれることを願っている。

#### 6. 私たちが人々に呼びかけるイスラーム

今日、イスラームのイメージ (ṣūra) は大きな歪曲 (tashwīḥ) に苦しんでいるが、その背景には主に2つの問題がある。第1は、ムスリムたちがその教えの真実を忘れていること、第2は、イスラームの敵がそのイメージを歪ませるために執拗に行ってきたことがその良い部分をすべてかき消してしまっているだけでなく、そのイメージに対して非難や批判を加えていることである。この忌むべき現状には直ちに終止符が打たれるべきであり、そして明瞭かつ正確にイスラームの真実が明らかにされなくてはならない。

実にイスラームは明らかな真実であり、権利、善、正義と同様に否定することができないものである。過去の諸問題を踏まえた上で、私たちが人々に呼びかけるイスラームは、クルアーンと預言者のスンナに含まれているそれぞれのものである。イスラームの原理が示すアッラーの唯一性と超越性、アッラーへの信仰、イスラーム法が保障する人間の尊厳、イスラームが強調する社会統合 (al-tamāsuk al-ijtimā‘ī)、イスラームの最も重要な基本の1つである人間にとって必要不可欠なもの

に対する保障、イスラームにおいて不可欠な美徳の奨励、イスラームを忠実に体現するウンマの建設、イスラームの勝利まで絶え間なく続けられる行動。これらすべてが重要なのである。

革命的ムスリムたち (al-Muslimūn al-thā'irūn) について言えば、彼らはイスラームを人間の生のあらゆる側面を包括する普遍的なダアワと捉えている。そして、クルアーンとスンナの諸規則に従い、生のあらゆる領域にイスラームを適用することを目指している。彼らの目的は、人類の幸福と平和の達成であり、善を勧め、悪を懲らしめることである。彼らの断固たる意志は、あらゆる種類の抑圧、搾取、頹廢を払拭し、正義を確立し、人々に奉仕し、すべての市民に必要な不可欠の食料、衣料、医薬品、住居、教育を保障しようとするものである。そして、人々に対してあらゆる正当な利益への門戸を開き、あらゆる合法的手段でもって諸国家 (al-bilād) の富を増大させ、人々のあいだに公正かつ公平に分配することを奨励するのである。

## 7. シリアは植民地主義とその支持者との闘争にある

他のアラブ諸地域 (al-aqtār al-'Arabī) と同様に、シリア地域 (al-quṭr al-Sūrī) も、植民地主義と国際的な策謀の犠牲者であった。シリア地域は、ムスリムを従属させ、資源を篡奪し、その根本を断つために、広大なイスラーム世界から分割されたのである。にもかかわらず、この地域は、これも他のアラブ諸国と同様に、自らを解放し、独立のために輝かしく闘うことにおいて、いかなる努力も犠牲もいとわなかったものである。

しかし、植民地主義は、この地域から退く前に、莫大な富と大土地所有を背景に権力を得た指導者たちによる誤った民主的体制を確立した。そのため、祖国 (waṭan) の独立初期において統治を担った民主的体制と呼ばれるものは、市民 (mawāṭin) に対する過重労働と篡奪を引き替えに、封建主義の勢力と搾取の資本主義の拡大を助長しただけであった。有能で才能に恵まれた人々は、公的領域から排除され、その外部に留まることを余儀なくされた。もし彼らが、独立の強化、市民の自由の保護、民主主義の深化に参加することが許されたのならば、祖国を分割し、発展を妨害しようとする敵の意図を牽制できたであろう。

独立当初から、イスラーム運動は、人々に対して植民地主義の意図と政策を科学的かつ包括的に検証し、その背後にある真の動機を注意深く検証することを呼びかけてきた。対して、植民地主義勢力は、常に人々に対して経済的な願望こそが国際的な植民地主義運動の不可欠な原動力であることと説いてきた。その理由は、当然ながら、真の動機を隠蔽するためである。真の動機とは、すなわち、このウンマに深く根ざしたアッラーの教えに対する嫌悪である。不幸なことに、植民地主義者によって育てられ、彼らの策動の遂行に荷担させるために生み出された手先たちは、経済的な願望こそが植民地主義の背後にある動機であると主張し続けた。彼らは植民地主義との戦いにおいてこのスローガンを振りかざし、最も重要な秘密を暴いたのだと主張したのである。

## 8. ウンマの大衆 (jamāhīr) と諸政府とのあいだの深い溝

ウンマにおける大多数の者が、貧困、無知、病理、専制のために、様々な種類と形式からなる大量の資源を投じることで巧妙に企てられた洗脳活動 (dimāgh madrūs) の犠牲者となった。しかし、それにもかかわらず、私たちのウンマの大衆は心の奥底に疑念を抱き続けたため、伝統的な指導者や日和見主義者の集団に対する信頼を低下させていった。これらの指導者は、一時休戦を受け入れな

がらもイスラームを嘲笑し、彼らの目的の達成と統治の強化のために利用したのである。

同時に、アラブないしそれ以外の民族主義 (qawmīya) の諸党派が、イスラーム運動との露骨な闘争を展開している。彼らは、公的領域の外部にイスラームの代表者を締め出すことができるような影響力を保持すると主張する。共産主義運動は、当局や政治家が関わっているすべての矛盾を逆手にとって地道に活動しているが、その反イスラーム的性質はアラブ地域やイスラーム世界においてその成功の機会を奪うこととなっている。

この不安定な状況の結果、民主制度の崩壊と、欺瞞に満ちた動機や意図およびそれら相互の関係性が見え隠れる軍事クーデタの連続が不可避となってしまった。

## 9. エジプトとシリアの統合の実験

エジプトとシリアの統合の実験について言えば、アラブ連合共和国は、個人的利益と日和見主義者および職業政治家の党派的利益の所産であった。その結果、統合を推進し、それを通して政治的名声を得ようとした者たちは、アラブ連合共和国を食物にすることに失敗した後はその転覆の謀略を企て、結局、統合の解消という不名誉を被ることとなった。しかし、統合の解消をめぐる利己的な者たちの企てを後押ししてしまった他の諸要素も見逃すべきではない。すなわち、不正の横行、拙劣な運営、この地域〔シリア〕の大衆 (sha'b) に対する酷薄な扱い、そしてその大衆の願望をくみ取れなかったことである。分離〔統合の解消〕という罪は、約15年にもわたって宗派主義政党 (al-hizb al-tā'ifī) の全面的なお墨付きを享受してきた。その政党は、ウンマの分離・分裂の原則を一貫した政策として採用しており、またそれを断固たる意志と姿勢でもって固守してきたのである。

## 10. バアス党による権力掌握

エジプトとシリアの合邦解消の後に成立した政権は、シリアのバアス党が軍内部での勢力を拡大させるのに必要とした僅かな期間しか存続することができなかった。その政権が合邦解消を目指す者を含んでおり極めて脆弱だったため、バアス党にとって権力掌握は非常に容易のものとなり、転覆にはわずか一握りの戦車を必要とただけであった。

巧妙に企てられた一連の内部粛正の後、バアス党は今日のこの破滅的な状況を作り出した。

シリアにおけるこの宗派主義政党は、その統治において2つの極めて重要な価値観 (qīmatayn) を利用した。まず1つは自由であり、これは圧倒的な勢力を持つ人々のあいだでは極めて効果的な力である。もう1つは統一であるが、これはこの地域〔シリア〕はもちろんのこと、それ以外の人工的に分断されたアラブ諸地域のすべての市民が切望するものである。この2つを操作することで、バアス党は政治的影響力の拡大を可能としたが、しかしながら党機構と規模においては大きな発展を達成できていない。その日和見主義となりふり構わぬ権力への執着は、党が遂行した一連の初期の軍事クーデタ (al-inqilābāt al-'askarīya) に見ることができる。このことから、私たちはこの政党が権力掌握以来犯してきた数々の犯罪を説明することができる。すなわち、この宗派主義政党自体の犯罪、そして、イスラーム的価値観と倫理の欠如というウンマに対する犯罪である。このイスラーム的価値観と倫理というのは、危険な逸脱を防ぐことができるものである。

この政党が権力として行ってきた政治的試みは、かつて今も大いなる災いとなっている。国内

においては、自由を抑圧し、政党を廃止し、報道機関を国有化し、人々を投獄し、党の不正と人々の幸福の侵害に対する抗議の声を上げた者たちを処刑してきた。バアス党は、政治活動の最も根本的な意義を貶め、誠実な人々を追放し、政権の周辺に衛星のようにたむろすることで不当な収入を得て違法な富を築く党の手先や腐敗した者たちを好んで登用してきた。

その結果、バアス党はある特定の人間の集団となり、それをまとめあげるものは何もなく、強いて言えば相互利益と不確かな忠誠のみである。さらに、バアス党は、一連のクーデタを通して軍の科学的小および軍事的能力を骨抜きにした後に、今度はそれを政治に送り込み、国境線の防衛と失われた権利を回復するための機構としての軍の最重要義務を忘れさせたのである。また、「民主主義」のイメージもバアス党によって歪められた。憲法は形式のみとなり、国民投票は茶番となり、大衆組織 (al-munazzamāt al-sha'biya) と呼ばれるものは不興を買うこととなったのである。

### 1.1. シリアの政権による宗派主義

状況はより悪化してしまった。つまり、シリアの政権は宗派主義の泥沼に落ちたのである。

これは極めて危険な問題である。そのため、イスラーム革命は、常に宗派主義に対する自らの立場を明らかにし、その分析と評価において客観的であり、この問題に対して率直に向き合うことを心掛けてきた。なぜならば、この問題の本質に迫らず、因果関係の把握を看過することは、単にそれを複雑化させるだけではなく、その危険性を増大させてしまうと、革命は確信しているからである。また、革命は、もはや挑発と扇動の域を超えた政権の露骨な宗派主義的政策について口を閉ざすことを、反逆に等しいものだと捉えている。

イスラーム革命は、イスラーム史の初期に現れた宗派主義的潮流でさえ、衰退と崩壊の進行を十分に指し示すものであったと捉えている。しかし、イスラーム革命は、遠い過去に宗派主義的潮流が生み出される原因と根拠が消え去ったとき以来、それに特別な関心を払わないこととした。

ところが、実際には宗派主義は水面下で進行し、「ラー [アラビア語で否の意]」と言うことができるすべての者たちを党機構から排除した後は、ほとんどの人々の利益に反する目的のための脆弱な党機構を護持するための歪んだ手段と化した。

この宗派主義の欺瞞的な行動の1つは、1967年6月5日の〔第3次中東戦争の〕敗北の直接的責任を負う国防大臣を最高地位へと昇進させたことである。これは人道の歴史において最も奇妙な応報であり、その後の顛末はよく知られている通りである。

ハーフィズ [・アル=アサド] とその弟リファアトの2人、そして宗派主義的理由によって彼らに頭を垂れる者たちが、権力を完全に掌握している。彼らは、独裁的支配によって、この地 (al-bilād) を越えて、悪業を重ねている。そして、ムスリムたちを隷属させ、その富を篡奪し、その精神を弱体化させ、墮落を拡大させている。彼らは雇われ兵の集団を用いるが、その後は彼らの中傷し、忘却へと押しやり、他の集団と置き換える……。そして、その新たな者たちも同じ運命をたどるのである。

バアス党について言えば、彼らはその集団を単なる上辺だけのものに変えた。その集団はもはや政権の実像を隠すことができるものではない。バアス党は、現代のイエニチュエリ (al-inkishārīya al-hadītha)、例えば、防衛隊および攻撃隊 (Sarāyā al-Difā' wa al-Sirā'), 特別部隊 (al-Wahadāt al-Khāṣṣa)、ムハーバラート (al-Mukhābarāt) などを結成した。

また、彼らは、でっ上げの憲法の採択と人民自身が認めない人民議会の設置によって、人々の

意思を裏切った。アサドの大統領任期の初めての延長をめぐる国民投票では、なんと死者がそれに参加したのである！

## 1 2. アラウィー派の人々への訴え

イスラーム革命は、率直かつ誠実にアラウィー派の人々に向けて自らの希望を訴えたい。あなたがたは、私たちがあなたがたに対して恨みも憎しみも持っていないことを、よく知っているはずである。その証拠は私たちの近い過去に見ることができる。幾度となく、人々は、皆いづれからの宗派に属しているにもかかわらず、信頼に足る、支持できる指導者を承認してきたではないか。

国内のプロパガンダの機構と、国外で活動する者たちによって、実に10年以上にわたってハーフィズ・アル＝アサドの権力を強化し、彼の能力を賞賛するための熱烈な努力が続けられてきた。にもかかわらず、それらは決定的に失敗し、ただ人々のアサドに対する憎しみを増幅させただけである。

さらにもう1点言えば、この地域 (qutr) [シリア] の人口の9パーセントないし10パーセントが、多数派を支配することなど許されるものではない。なぜならば、それは物事の論理に反しているからである。アラウィー派の賢明なる者たちは、ハーフィズ・アル＝アサドとリファアト・アル＝アサドの帝国 (imbrāṭūriya) を支持することが、私たちとあなたがたのどちらにとっても義務などではないことを理解してくれるはずである。

私たちの場合、この宗派間戦争 (ḥarb al-ṭawā'if) は、少数派の支配から自らを防衛しようとする多数派によって行われたものではない。少数派が少数派であることを忘れた少数派、そして、人口の大多数を力によって抑圧的に支配しようとした試みが失敗してきたという歴史の事実とその必然を知らぬ少数派によって行われたのである。

抑圧をも恃まない宗派主義的政権 (al-nizām al-ṭā'ifi) による扇動的で暴力的な政策は、もはや人々の忍耐を超えており、さらには不幸な内戦の火を点けるのに十分であった。その政権が、過去10年間、内戦の勃発を未然に防いできたなどと考える者は誤っている。真に内戦を抑止してきたものは、人々の叡智と気高い精神、そして洗練された価値観なのである。しかし、私たちが人々の気高い精神と誠意が、最後まで利用され続けられるのだとすれば、それは大間違いである。

## 1 3. アラウィー派への提言

私たちは、ハーフィズ・アル＝アサドとその卑劣な殺人者の弟が属するアラウィー派の人々が、悲惨な結末へと向かうこの悲劇の阻止に積極的に参加することを望んでいる。

また、アラウィー派のなかの思慮深い人々に対して、その考えを改めることを呼びかける。私たちは、欺瞞も不義もなく、ここに宣言する。この極めて危険な状況を生み出す原因となっている腐敗した諸要素を擁護する者たちを振り払おうとするあなたがたの姿を目にしたい、と。あなたがたにはまだ十分な時間があり、また、人々は改心する者たちを温かく迎えるのに十分な大きな心を持っている。

私たちは、力の行使が問題の解決のために必ずしも必要ではないと強く信じている。むしろ、建設的な対話と相互の信頼を通して問題を解決することが、自然の摂理であろう。しかし、一方が他方を承認せず、相手に対して力でしか対応しないのであれば、[力の行使の] 他に何ができようか!?

これらのことから、現政権はもはや引き返せないところまで来ており、彼らが自らを抜本的に見直すことはもはや不可能であると私たちは判断した。そして、ここに宣言する。欺瞞と虚偽で知られる者たちに対しては、休戦も、武器の放棄も、交渉もない。私たちは、いかなる危険や障害があろうとも、この抑圧的な政権が崩壊し永遠に消え去るまで、私たち自身の道を歩み続けるのである。

「われ〔アッラー〕は如何に多くの（安楽で裕福な）生活に有頂天になった町を、滅ぼしたことであろうか。それ以来、かれらの居所には（至極）僅かな人びとを除き住む者もない。（結局）われ〔アッラー〕が、それらの相続者である。」（物語章 248）